

## カリバオウギは生きていた !!

札幌市 船迫 吉江

20世紀末、先の北方山草会の高野会長さんらが「カリバオウギを守る会」の活動をしていることを知りました。そのいきさつに関する資料などを頂き、内容について知ることが出来ました。この植物は1930年、当時余市実業女学校の教頭で、後志地方の植物を研究されていた山本岩亀先生が、檜山管内の狩場山で発見し、当時北大の宮部金吾教授らが新種として発表されたものと知りました。ですから、学名は *Astragalus yamamotoi* Miyabe et Tatewaki とされています。その後久しく姿が確認されることなく、もしかすると生きていますか?1989年の環境庁の報告では発見されていないので、絶滅したらしい?ということでした。

私事ですが、なぜこの植物について知りたい!知りたい!と思ったかと言いますと、日本植物画倶楽部の顧問をされている大場秀章先生が、絶滅危惧植物図譜を企画されたところと重なり、私は春はすみれ、夏はマメ科の植物を楽しんでいた頃でしたから、幻のマメに挑戦してみようなどとたいそうなことを思ったのです。そして、何故か高野会長の庭にあったこともあり、画にして残してほしいという願いもあって、それほど暑くもない2001年の初夏のころ、高野会長のお宅の庭に通うことになりました。初めて対面した時、茎の赤さと鮮やかなピンクで溢れる躍動感に包まれた花に感動し、魅了された日のことを昨日のこのように思い出します。

その花の外形は、草丈が大きなもので60cmくらい。葉は奇数羽状複葉で短い柄があり、小葉は長円形で対生する。花は6から8個総状につけ、花柄は1mmで短く毛がある。花冠は紅紫色で長さ2cmくらい、翼弁と竜骨弁は同長、果実は楕円形で弾ける。果実の形はなんと愛らしいことか!

その後、自生地では生きていますか?いないのか?が続いていましたが、標本によれば1993年6月5日に発見地の狩場山とは別の山で採集されました。その後1996年7月10日に狩場山近くの河原で発見・採集した標本や、2003年7月採集の花や大きなタネの標本があり、2004年6月25日にも同じ河原で花やタネが確認されています。これらはいずれも本会の故松井さんや吉中さん、梅沢さんらが採集したもので、札幌市の博物館活動センターや北大総合博物館の標本庫で、何とか生き延びていたことが確認できました。現在、環境省は絶滅危惧IB類(EN)、北海道は絶滅危機種(Cr)に指定しています。

2019年になって、6月の土砂降りの日に、狩場、茂津多方面の野の花観察会に参加しましたところ、川縁で大きな株を確認する機会を得ました。洪水被害にあったそうですが、それでも自然の中で力強く生きているカリバオウギを確認できたことは、この年一番の嬉しい出来事でした。

この貴重な植物を描き終えて、2004年春、鎌倉のアボット社から「日本の絶滅危惧植